

## 教会暦と聖書の流れ

先週の「皇帝への税金」についての問答の後、「復活についての問答」があり、きょうの「最も重要な掟」の話になります。さらにこの後の「ダビデの子についての問答」も含め、マタイ福音書ではイエスと当時の有力者(ファリサイ派、ヘロデ派、サドカイ派)との論争・対決が続いていきます。

## 福音のヒント

(1) イエスがファリサイ派の人の質問に答えて引用する律法の言葉は、申命記とレビ記から採られたものです。

申命記6・4-5にこうあります。「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」紀元前13世紀、イスラエルの民はエジプトを脱出し、荒れ野を旅して約束の地に向かいました。

申命記の中心部分、この荒れ野の旅の終わりにモーセが民に向かって、遺言のように語った律法についての説教です。この箇所は「シェマー(聞け)」という言葉で知られ、毎日の祈りの中で唱えられる信仰告白の言葉でした。ユダヤ人にとって間違いなく最も大切な掟です(右のイラストにある文字がヘブライ語の「シェマー・イスラエル」=「聞け、イスラエルよ」です)。



レビ記19・18にはこうあります。「復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。わたしは主である。」レビ記の17～26章は「神聖法集」と呼ばれています。レビ記19・20の「あなたたちは聖なる者となりなさい。あなたたちの神、主であるわたしは聖なる者である」は神聖法集の考えを最もよく表す言葉だと言えるでしょう。「聖」とは「隔絶したもの」を表し、人間とまったく違う神の特性を表す言葉です。イスラエルの民はこの聖なる神に救われた民として、神が聖であるように聖なる者にならなければならないのです。「聖」は祭儀的な意味でだけ語られるのではなく、19章18節が典型的に示すように「神の愛を生きる」ことでもあるのです。

これら2つの掟を最も重要な掟であるとする言葉は、イエス以前には知られていません。ただし、ルカ10・27では律法学者がこの2つの掟について述べていますので、当時のユダヤ人にとってそれほど意外な言明だと言うこともできないのかもしれませんが。

(2) マルコ福音書の同じ文脈にある話と比べると、いくつかの違いがあります。マルコでは相手が「律法学者」となっていて、イエスが最も重要な掟としてこの2つの掟を挙

げたことに律法学者は賛同し、イエスも彼に向かって「あなたは神の国から遠くない」と言われます。マタイはイエスの言葉に対する相手の反応を省いています。

また、マルコでは最も重要な掟として、この2つの掟を挙げ、「この二つにまさる掟はほかにない」と言うだけですが、マタイでは「律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている」と言われています。

さらに、マルコ福音書になくてマタイにあるのはこの2つの掟は「同じように重要である」という言葉です。原文では「ホモイア(似ている)」という言葉が使われています。新共同訳のように訳すと「重要さの程度が似ている」ということになりますが、「2つの掟の内容が似ている」とも受け取れます。神を愛すること、と、隣人を愛することは別のことではなく、1つのことだと言ってもよいのです。

マルコでは、この2つの掟を重視する点でイエスと律法学者の間に対立はありません。マルコ福音書で律法学者が批判されるのは、彼らの生き方のためです(マルコ 12・38-40 参照)。一方マタイは、当時のファリサイ派的な律法解釈とイエス(あるいは初代教会)の律法解釈との違いを示そうとしている、と言えるでしょう。神の人間に対する望みは、律法の個々の掟の要求を1つずつ忠実に果たすことである、という考えと、すべての律法の根本にこの2つの掟を見て、さらに、隣人を愛することこそが神の望みであるとする考えです(マタイ 5・43-48、7・12、12・10-12、25・31-46 など参照)。

(3) 聖書の語る「愛」は、「好きだ」という人間的な愛着ではなく、そのものをそのものとして「大切にすること」です(根本にあるのは神の人間に対する「愛」です)。

「神への愛」とはどういうことでしょうか。神は人間に何かをしてもらうことを必要としているわけではありません。神は無条件に人間を愛する方です。その神の愛に気づき、感謝すること、これが神を愛することだと言えるでしょう。この神とのつながりを大切にする、と言ってもいいかもしれません。そして、このように「神を愛する」ことは、必然的にわたしたちを「隣人を愛する」ことに向かわせるのです。あるいは、神を愛することの具体的な表れが人を愛することだと言うこともできるでしょう。

39 節の「自分のように愛しなさい」という言葉に引っかかる人もいるかもしれません。「自己愛(ナルシズム)」という言葉はあまりいい意味では使われないからです。しかし、「本当の意味で自分を大切にすることができない人は他人を大切にすることもできない」という真実も忘れてはならないでしょう。

「隣人」という言葉は本来、「近くにいる人」を表す言葉ですが、ルカ 10 章の「善いサマリア人」のたとえ話で、イエスはこの隣人愛の掟をどう受け取るべきかをはっきりと示しています。「隣人とは誰か」の範囲を決めてからその隣人を愛する、というのではなく、あのサマリア人のように、愛することによって相手が誰であれ「隣人になっていく」ことができるのです。

解説はこのくらいにして、わたしたちが日々の生活の中で、この2つの掟をどう生きているかを見つめてみましょう。